



-----お知らせ-----

市民文化祭参加  
「郷土史展」

11月19日(土) 午後1時～5時  
20日(日) 午前9時～午後4時

「旧高津村のすがたと人々Ⅱ」(仮テーマ)

於：勝田台文化プラザ2階 展示室  
・設営準備は、19日午前9時より会場にて

8月21日(日) 例会

- ・学習会原稿打合せ 郷土史研通信51号発行
- ・午後1時半～ 八千代市立郷土博物館にて

9月11日(日) 拡大役員会

- ・「史談八千代」原稿締め切り、編集打合せ 他
- ・午後1時半～ 勝田台七丁目公会堂にて  
(博物館は選挙のため使用できず変更しました)

9月18日(日) 例会

- ・展示作品・機関誌編集打合せ 他
- ・午後1時半～ 八千代市立郷土博物館にて

10月9日(日) 例会

- ・機関誌「史談八千代」30号校正 他
- ・午後1時半～ 八千代市立郷土博物館にて

10月16日(日) バス見学会(文化財保護の会行事)

- ・テーマ：土浦市周辺の史跡、文化財を訪ねる
- ・集合：勝田台北口7時50分
- ・小田城址(国史跡)、土浦市立博物館、旧土浦中学校、阿見町自衛隊内予科練記念館など
- ・参加費：3000円、昼食は食堂を予定・自己負担
- ・申し込み：平野寿子、中島和子まで

11月13日(日) 展示作品共同制作

- ・文化祭展示作品制作作業
- ・午前9時半～午後4時半
- ・八千代市立郷土博物館にて
- ・全員でお手伝いください

-----お願い-----

機関誌「史談八千代」30号に  
会員全員の原稿を掲載します

当会機関誌「史談八千代」30号発刊を記念し、さらなる発展を期して、会員すべての方から原稿をいただき会員特集として掲載することが4月総会で決定しております。

機関誌30号の発表内容は、前号に引き続く高津村総合研究特集のほかに、おひとりおひとりの声の寸言を特集した異色の号となります。どうぞお喜楽にお書きください。

つきましては下記要領で執筆いただき、8月中に担当者増田までお送りください。(会長・村田)

- ①字数は300字程度、最大1ページ(29×39)
- ②内容は寸評的なもの、近況、歴史随想・小論、歴史探訪など何でも結構です。
- ③原稿は、テキスト、Word、一太郎の添付メールでも、メール本文での送付でも、FD手渡しでも、また手書きでもかまいません。

-----報告-----

5月28日(土)～29日(日) 一泊旅行見学会  
(蕨の細道・丸子・静岡市方面)

17年度の郷土史研旅行は、晴れ男晴れ女の神通力で、晴天に恵まれ、参加者17名全員が、宇津ノ谷峠の難所だった蕨の細道～明治トンネルを踏破し、楽しく無事終わりました。

行程：  
5/28 勝田台北口6:50集合＝バス＝柴屋寺＝丸子宿＝道の駅・歩・蕨の細道・明治トンネル・宇津の集落・お羽織屋・道の駅＝島田市博物館・島田宿大井川川越遺跡＝蓬莱橋＝焼津ホテル泊

5/29 藤枝市内＝志太郡衙跡＝岡部宿・歴史資料館＝車窓より五智如来公園＝誓願寺＝日本平～ロープウェイ～東照宮～日本平＝車窓より駿府城跡＝勝田台19:30解散

次ページに楽しい旅行の感想を掲載しました

5月28～29日  
東海道中膝栗毛の旅  
十返舎一九

真砂弘

#### 島田の宿（二十三次）に来て

大井川の手前にある島田の宿へやってくると、川越し人足がすぐに寄ってきて

「旦那衆、川越しをしておくんなせえ」

「二人でいくらだい」

「へいへい。今朝方やっと川留めがひらかれやしたんでね、流れも急で深いし、肩車で越すのはちょっと無理だ。蓮台で向こう岸までわたすから、お二人で八百・・・どうです、安いでがしょう」

「とんでもねえ話だよ。八百たあ、また高くふっかけたもんだ」

.....

こんな話が聞こえてきそうな5月28日の1泊2日のバス旅行（17人）でした。

今回の旅は盛り沢山でしたが、メインは江戸時代の東海道の旅がどんなものだったのかを知る旅と決めて十返舎一九流に書き散らします。

島田市博物館で説明があり、大井川を渡るには、川札（人足一人を雇うために札一枚が必要）を川会所で買い、川越し人足に渡してから、人の肩や蓮台に乗り川を越したそうです。弥次さんたちの会話のような「流れが急だ」と肩車は無理で蓮台になるが、平蓮台二人乗りの場合、担ぎ手6人で川札6枚と台札

（川札2枚分）の計8枚が必要になる。川札1枚の値段は、川の深い「脇通」になると94文と高くなり、「八百文」となってしまう。（1文を30円と換算すると高い値段になる。）

弥次さんの「高い」という実感は、白米一升40文の時代ですから同感します。

明治時代になって橋のないの

は不便ということで、蓬莱橋ができ、長さ897mは、ギネスブックに認定された「世界一長い木造歩道橋」です。実際に対岸までテクテク歩くと目がふらふらしてきたとみんな言っていました。

#### 丸子の宿（二十次）に来て

丸子の宿の茶店へ飛び込んだ。

「弥次さん、せっかくの名物だ。ここで、とろろ汁を食べようよ」

「そうしよう。親爺、とろろ汁はできるかい」

「へえ、いまできず」

「できない？こいつは困ったな・・・」

弥次さんは困った顔をしたが、この地方では「できず」は「できます」ということなんだが弥次さんは反対の意味にとってしまった。



広重の「東海道五拾三次之内・鞠子（まりこ）」の絵では茶店が描かれているが、現在の丁字屋（ちょうじや）は盛大で、混み合っていました。自然薯をすり、しろ味噌を入れてうすめ、温かい麦飯にかけて食べるという昔ながらの名物でした。

丸子宿の近くには、片桐且元の墓のある誓願寺。みなさんは、珍しい天然記念物モリアオガエルに興味がいって、アオガエルも歓迎するようにその姿を見せてくれました。

また、柴屋寺での庭の眺めは、銀閣寺の庭園に似て遠く山が見える借景が鮮やかでした。連歌師飯尾宗長が今川氏の保護を受けての文化でした。庭の池に映える月が、竹と調和して、「吐月峰」の名がある。

#### 岡部の宿（二十一次）に来て

今回の思い出は、「鳶の細道」を汗をかいてハイキングしたこと。名に高い宇津谷峠は、丸子と岡部宿間の山越えです。この峠は、戦国末期に開かれたといい、それ以前は、在原業平の東下りで知られる「鳶の細道」が主街道であった。宇津谷峠の道は、木の根や石が露出した陰路である。木々が生い茂り、見通しが悪くて昼でも薄暗く、山賊でもでそうな雰囲気でした。



宇津谷峠の数珠の形の十団子家々の軒に、堅い10個の餅を糸で繋がれた「十団子」が、厄除けとしてぶら下がっていました。

#### 秀吉の羽織

宇津谷峠の麓の集落に御羽織屋がありました。北条氏制圧に向かう途中、秀吉がきていた紙子の陣羽織を与えられたということである。ここ通過する大名に触られて、磨り減ったものを修理したものだそうだ。小さい秀吉にはでかく見せるために大きいのだそうだ。（「そうだ」と疑ってるみたい）

#### 終わりに

今回の旅は、「志田郡衙跡」「日本平～久能山東照宮」など記す事は沢山ありましたが、東海道の旅にしぼって報告させていただきます。天気に恵まれ、名調子の安藤ガイドさん、地元の村松さんの接待を受け、楽しく行ってこれました。牧野さん初め準備ご苦労さんでした。足の痛みは大丈夫でしたか？

## 旅のコメント

### 藤枝市史余談

石井尚子

鳶の細道を尋ねたこの度の旅行の2日目、志太郡衙跡にゆく途中藤枝市の蓮華寺池がありました。綺麗な公園だとみましたが、この池には幕末の歴史が数多くある事を知りました。

この池の奥には田中城があり1500年代に今川氏の家臣の居城として建てられ、後に武田信玄が甲州流軍学によって三日月堀等を作り、城を整え平城でも難攻不落の有名な城となりました。家康がこの城を落とすのに八年もかかり駿府城の西の護りとして整備しました。

徳川4天王の一人として有名な本多忠勝の一族が藩主となり円形放射状の設計で当時としては最も進歩した城なのです。現在本丸跡に建てられた西益津小学校校庭に田中城の模型がつくられ三日月堀等の形態がわかるようになっています。城南を流れる六間川を利用して水路をつくり、せきとめると四の堀、三の堀、二の堀まで水がはいり浮城となったそうです。さらに姥が池を水源として木や竹でつくられた水道管で上水道がつくられていました。家康は苦勞して攻略した田中城が好きで鷹狩りに度々滞在したそうです。

元和2年(1616)年ここで鹿狩りをした時、茶屋次郎のすすめで鯛のてんぷらを食し腹痛をおこし駿府城で75才の生涯を閉じたエピソードは有名です。そんな田中藩で幕末にはいち早く砲術をとりいれ、さかんに蓮華寺池で試射を行いました。本多公が美濃勝につくらせた一貫匁玉砲は薩摩藩が領地一万石と交換を申し込んだ有名な大砲だったのです。

こんな田中藩ですが幕府が崩壊し、明治元年(1868年)新政府ができて徳川慶喜の後継者として徳川家達が駿府70万石として一地方大名となっはいい、周りの田中城の本多公は安房館山に移封されました。

藤枝バイパスをたびたび復讐したこの度の旅行で東海道の一宿場町としての藤枝だけでなく江戸時代には徳川の護りとしての拠点であった地である事を知らされました。(藤枝市史より)

## 例会報告

### 5月7日(土)

・午前10時～12時 八千代市立郷土博物館にて、22名が参加し、学習会と情報交換をしました。

・新しく発行された『八千代の歴史 資料編近世IV』から高津と高津新田研究の参考となる史料の解釈と検討を行いました。

・史料を読んでの疑問点や考察  
①2月例会で検討した「文化十一年五月 祖高山高秀霊神式百年御忌御法事御祭事記録」その他高秀霊神祭礼に関する文書＝領主方に名前のある「宮本 伊右衛門光胤」は船橋大神宮の社家ではないか？

「別当正福寺」の状況、「小前」に下賜された金品に種類の違いがあるのはなぜか？

②「天保十三年高津明神等祭り方につき一札」＝粗略にしないようにという神仏の中に「薬師」があるが、薬師堂がどこかにあったのでは？

③「天保三年高津村去卯御年貢米相納申目録」＝領主側へ前払い分が多い。計算値が合わない。「名主」と「年番名主」がある。

④「延宝四年高津新田検地張写」＝4名が屋敷地を持っている。数十名の耕作者の名前があるが、「八郎兵衛」以外にその後の文書や現在の屋号に相当する名前が見当たらないのはなぜか？良田良畑はほとんどなく「野」が多い。

⑤「安政五年高津新田磯女御祝儀賞請覚帳」＝実初村など習志野・船橋市内との縁が多い

その他貴重な意見や質問、問題提起が出されました。

・史料を解釈するため、古文書によく出てくる単位と数え方を学びました。

・新史料として高津観音堂内の観音像の修理札と入仏式の札の写真コピーを発表、そのいきさつを考察しました。(蕨・記)

### 7月17日(日)

・午前9時半～12時半 八千代市立郷土博物館にて、22名の参加で調査研究の情報交換を熱心に行いました。

1. 旧高津村総合研究、2年目の課題と調査の進行状況の報告、資料の紹介

①女人信仰について＝子安講、および十九夜塔など石造物調査(蕨) ②高津山観音寺所蔵史料＝「境内観音堂縁起」について(佐久間・畠山) ③観音堂に関する調査中間報告＝「第六番」の御詠歌額のなぞ(佐久間) ④高津における大師信仰(斉藤)&「中村忠治之記念碑」銘文(平塚) ⑤正福寺に関する資料整理(森山) ⑥地図に見る旧高津村域の変遷(佐藤) ⑦間宮士信による百草八幡神社所蔵の古刀箱書き(畠山) ⑧「干城録の間宮家」(村田)

2. 「史談八千代」30号記念特集・文化祭テーマについて

午後からは、観音寺境内十九夜塔の調査などのグループ活動を行いました。(蕨・記)

### 博物館主催講座の現地下見

5月7日、例会を終えた午後から、会員9名で「八千代市立郷土博物館主催講座 平成17年度第1回「再発見八千代」印旛沼開発の史跡をたどる」の下見に行ってきました。長門川の「長門水門」や利根川の「印旛水門」北印旛沼と西印旛沼をつなぐ捷水路、平戸にある新川開削の祖・「染谷源右衛門の家」や明治の調査に協力した「植草兵左衛門家の家」、天保年間に新川を開削するために庄内藩から派遣され横戸村で亡くなった「庄内大服部村百姓仁兵衛の墓」、開削の状況が確認できる横戸緑地の位置を確認し、見学者の乗降位置、乗降位置から見学場所までの誘導方法等を確認していました。

講座のコース確認だったのですが、私にとっては始めていく場所も多く、とても勉強になりました。(増田・記)

6月5日バスツアー参加報告  
印旛沼開発の史跡をたどる  
成瀬摩希子

平成17年6月5日(日曜日)、市立郷土博物館主催講座「再発見八千代」の一環で『印旛沼開発の史跡をたどる』をテーマに、印旛沼の水門や排水機場、江戸時代の掘割の跡等をめぐるバス見学会が行われました。今回初の試みとして、我が郷土史研究会の三氏が講師として案内役を務めることに。午前中を滝口さん、午後を牧野事務局長、お昼休みの博物館の植物の説明を始め、各地の植生の説明を酒井さんがそれぞれ担当し、最見目抜きで、内容の濃い充実した一日となりました。なお、増田さんと私が誘導役として、また、記録係として一日同行させて頂きました。一般公募は大人気を博し、定員の倍の応募を集めたのでした。充実の一日を網羅する事はとても不可能ですが、当日の様子を報告させて頂きたいと思います。

江戸時代の大改修によりこれまで江戸湾に流れていた利根川は、その水量も増して銚子へと大きく流れを変えました。印旛沼の水は通常は利根川へと流れていますが、利根川の氾濫時には水が逆流して大洪水が頻発。印旛沼は「あばれ沼」と呼ばれました。実に250年に及ぶ長い間この「あばれ沼」と住民の戦いは続くのです。その250年の歴史を辿るのが今回の見学会です。

恥ずかしながら新川がどっちに向かって流れているのかさえ良く分かっていませんでした。印旛沼には何本もの河川が注いでいて、新川もその一つ。印旛沼に集まった水は長門川から利根川へと排水されています。江戸時代から長い事この

「あばれ沼」に悩まされて来た人々は時の政府に働きかけ、何度も疎水の開削を計画しますが、権力者の失脚や、資金不足などで昭和の時代まで完成する事はありませんでした。昭和の印旛沼開発の成果で、現在では印旛水門と排水機場、酒直水門と揚水機場で、水位が常に一定になるように調整されています。危険水位に上がった時は大和田排水機場が水を新川から花見川へと放流し東京湾へ排水して沼の堤防の決壊を防ぎます。印旛沼の水は工業用水、農業用水、水道水として利用されていて、地域に無くてはならない水資源となっています。

当日は、朝少し涼しい風が吹き騙されましたが、びっくりするほどの快晴で時間が経つ毎に暑い暑い一日になりました。

出発は8時30分、大和田図書館をわかば号で出発。まずは北上して、印旛沼から利根川に注がれている長門川と利根川の合流地点にある印旛水門へ。

大正時代この水門が出来た時は利根川の逆流は防ぐ事が出来るようになりましたが、増水した印旛沼の水のはげ口を失い、結局洪水を防ぐ事は出来なかったのです。今では隣に排水機場が造られていて川の水位を調整しています。ごく最近塗装をし直した綺麗な水門を見上げつつ、そんな印旛沼と利根川の関係や近隣の苦労の歴史などの説明を聞きました。



その後トイレ休憩を挟み、酒直水門へ。道が狭くバスで近くまで行く事が不可能な為、往復1時間程度の徒歩で行かねば

ならず、暑くて大変でしたが、道々草花を眺め、桑の実を食べたりと、思いもかけず楽しいピクニックでした。

印旛沼が干拓されて出来た水田や甚兵衛渡し跡を眺めながら宗吾霊堂へ。ここでは明治大正期の印旛沼開発を推進した吉植庄一郎の記念碑「吉植翁頌徳碑」を見学しました。

その後郷土博物館で昼食休憩。玄関脇のミズキを始め、博物館の樹木の説明を聞きました。

午後は南に下って、大和田排水機場内部を見学。排水機場の重要性が分かりました。新川や印旛沼の氾濫など考えた事も無かったですが、台風だろうと安心していただけるのもこの排水機場のお陰な訳です。



掘割弁天の元の宮跡の説明後、現在の弁天様をお参り。その後歩いて江戸時代の掘割工事で亡くなった庄内藩の百姓仁兵衛墓をお参りし、難事業に思いを馳せたのでした。墓石に刻まれた文字の不明部分もしっかりと確認する事が出来、大収穫でした。

次に向かった横戸緑地は掘割の際に出た土を盛り上げた跡です。上から眺める花見川はかなり下にあり、その掘割の大変さを実感したのでした。

その後予定通り図書館へ17:00帰着という日程でした。

バス旅行とはいえ途中一時間近く歩く行程もあり、大変ではありましたが、誰一人具合が悪くなる人もなく事故もなく無事終了をむかえました。企画運営の博物館の方々、講師の皆様ご苦労様でした。

高津の巡拝信仰  
調査グループ報告  
佐久間弘文

高津地区は大師巡拝の習慣が今でも続いている市内でも稀な地域だといわれています。今年の旧高津村研究では、今なお続く巡拝信仰の姿を通じてムラの人たちの信仰のかかわりを研究する調査をグループで行うことにし、大きく4つの調査班を作り各班が活動中です。

不明な問題は山積しているようで、グループ各員の悲鳴が聞こえています。会員皆さんの情報提供を待っています。

①吉橋大師巡拝調査班(齊藤・佐藤・小菅・鈴木) 平成7年に永年続いた吉橋の大師講が中止され、組織的な巡拝は高津のグループだけとなりました。この調査班は、もはや貴重な存在となった高津の吉橋大師巡拝の過去と現在のすがたを聞き取りを中心に研究中です。また高津地区に残された3ヶ所の札所について、改めて調査を進めています。

②相馬大師巡拝調査班(平塚) 高津観音堂境内の「中村忠次記念碑」には吉橋組大師講、相馬大師講の先達として活躍した先人の碑が残されています。この中村忠次氏とはどんな人であったのか、そのご子孫をたどり、現在も続けられている相馬大師巡拝のすがたを研究中です。たくさんのお盆には正福寺関係者による追善供養が行われ、地元の人たちの正福寺に寄せる思いは絶えません。古文書と石碑に残る正福寺の実態をどこまで解明できるか、懸命な調査が続いています。

③正福寺調査班(森山・中山・羽計) 高津における真言宗のルーツである正福寺の実態はいぜんべールに包まれたままです。しかし今なお8月のお盆には正福寺関係者による追善供養が行われ、地元の人たちの正福寺に寄せる思いは絶えません。古文書と石碑に残る正福寺の実態をどこまで解明できるか、懸命な調査が続いています。

④観音堂六番ご詠歌調査班(佐久間・滝口・清水・蕨) 観音堂本堂に掲げられている奇妙な

「六番ご詠歌」にまつわる観音巡拝のすがたを研究中です。ここは新阪東第六番の札所ではなかったか、との仮定から文献の調査と近隣の観音寺院を歩きながら、並行して「六番ご詠歌」そのものの解釈を多方面から研究しています。

佐倉藩のゆかりの地  
柏倉見聞記  
畠山 隆

先月中旬、「佐倉の古文書を勉強する会」の仲間達と佐倉藩山形分領の陣屋跡がある山形市柏倉を訪問した。この山形分領のことについては、『史談八千代』22号に牧野会員が「佐倉藩山形分領柏倉陣屋跡を訪ねて」として詳しく記述されているので、ぜひ再読していただきたい。

延享3年(1746)に山形城主であった堀田正亮(まさすけ)が佐倉に転封され、ここから佐倉藩は後期堀田氏の時代に入るが、正亮には山形領村山郡の内46ヶ村4万1千石余が引き継がれて佐倉藩領として与えられ、この時に佐倉藩山形分領が成立した。そして後年、分領を管掌するため村山郡柏倉(現在は山形市に編入)に陣屋が置かれた。

当時の陣屋の広さは約3町3反2畝歩あった。南北百余間、東西六拾余間の四方は石垣で囲まれ東正面には堀が水を湛えていたそうであるが、現在の陣屋跡は「堀田永久稻荷神社」(写真下)が小高い場所に祀られ、境内に「堀田氏功德碑」が建てられているのみで、陣屋跡地一帯は児童館や公民館・民家にとって代わられ、周辺に石垣の一部が見られるものの堀の跡も見当たらず、かつての陣屋跡の面影はない。



稲荷神社は安永7年創始当時

の社殿といわれるだけに、かなり風化も進んでいるようだ。宮司のご好意で社殿に上らせていただき内部を拝見。天保九年佐倉藩奉納の絵馬掲額や、近年度々訪れられたという堀田家前当主正久氏の揮毫など佐倉ゆかりの史料を見ることができた。

陣屋跡からほど近い場所にある明源寺は真宗大谷派の寺院(開山、慶長11年)で、元禄から享保にかけて山形城主だった堀田正虎が深く信仰したことから、その後正亮が佐倉に転封するまでの46年間山形堀田氏の菩提寺として繁栄した。寺院としてさして大きくはないが、こちら本堂の方は安永8年(1779)に建てられた総檜造りで、220余年の歳月に耐えて今でもがっしりとした風格を保ち、その古さからいって指定文化財にも値すると思われる建物である。



住職の話によると数年前屋根の修理をした際には、まだ檜の香が堂内に広がったという。漆喰の壁や欄間に施された蓮の花弁の透かし彫り・二十四孝の人物像など、かつて大名寺であった格式を今に伝えている。

正虎公はじめ歴代城主・堀田家家臣のご位牌に一同読経礼拝した後、裏山の墓地に案内していただいた。

ここには佐倉藩士やその妻らの墓が大小40数基あり、中でも目立つ墓碑の一つに「田内與七郎成伸」なる人物の墓碑があった。田内與七郎は天明7年佐倉城下の生まれで、14才の時父とともに柏倉に下り、やがて父の死後引き継いで任官し、生涯の大半約50年を柏倉陣屋の行政職務に捧げた。60才の時勘定頭に昇進し佐倉へ戻るよう命ぜられたが村民の嘆願により陣屋に留まったという。その間に数々の善政を施し村の恩人として前出の「堀田氏功德碑」にもその

名が刻かれてある。近隣には田内大明神と刻した石碑もあるというから後には神様にも祀り上げられたわけである。

墓地にはこのほか藩士の妻たちの墓が数多く見られた。「總州佐倉家中〇〇弥十郎妻之墓」などと刻された墓碑を見ていると、藩士とともに柏倉に嫁して亡くなった妻たちの望郷の念が碑文から伝わってくるように感じられた。ここからさらに20分ほど離れた寺山には上級藩士らを祀った五輪塔などもあるという。今回は立ち寄れなかったがまた別の機会があれば訪ねてみたいと思う。

**市内栗谷遺跡出土  
弥生後期の土器群  
藤由美**

1988年から行われてきた市内北部保品の東京成徳大学とその周辺の八千代カルチャータウン開発に伴う発掘調査が一段落し、今年(2005)5月に、整理作業を行ってきた八千代市遺跡調査会東部事務所で、この地域の上谷遺跡・栗谷遺跡などから出土した遺物の展示会が開かれました。

旧石器から中・近世までと幅広い保品の遺跡群ですが、遺構や遺物は、縄文早期、弥生後期から古墳前期、奈良・平安の3つの時代に特に集中しています。

市内の古代遺跡から墨書土器が多く出土していることは、今まででも有名でしたが、今回は栗谷遺跡から出土した完形に近い弥生後期の土器群がまとまって展示されていて、その姿は八千代市の文化財として十分に見ごたえのあるものでした。

また市内の台地上の弥生集落跡としては、中期宮ノ台期の環濠集落である田原窪遺跡が知られていましたが、この栗谷遺跡には、弥生後期の住居跡94軒と大規模なこと、そしてそこからまとまって壺や甕が検出されていることが注目されています。

栗谷遺跡の弥生後期の甕の多

くは、細かい縄文が施されていて、ふくよかな曲線と肌の美さがポイントの「教科書で習う弥生土器」とは、かなり違った印象を受けます。

これは、印旛沼南岸の弥生後期遺跡群の土器に共通する特徴で、特に普通の縄にもう1本細めの縄を巻きつけた縄を転がしてつけて細い縞模様を付ける「附加条縄文」やS(またはZ)の字が連続された帯を描く「S字状結節文」の技法はとても繊細です。



また頸部を縦に区分した中に波状の紋様が櫛描きされている、あるいは口縁部に数段の輪積み痕が残っている土器もあり、佐倉市王子台や江原台で出土した「白井南式」とされる土器型式のものや、大崎台で出土した型式の土器に類似しています。これらは弥生後期になっても、いまだ縄文が根強く残っている北総地域の土器群と文化の特性といえるでしょう。

しかし細かく見ると、近くの遺跡と全く同じ紋様構成の土器はむしろ少なく、また栗谷遺跡独特の土器群もみられるとのことで、頸部に輪積みの跡を意識的に残し、文様がなく、胴の上半分にはS字状結節文や小さな丸い刺突文でラインが1~2周めぐるっている土器、あるいは素口縁で胴部最大径以下に限って附加条縄文が施文されている土器は、北総の弥生土器の研究者から、栗谷遺跡出土土器を標式とした型式設定が適切と判断されています。

弥生後期という時代は、西日本では古墳時代になろうとする頃。一般的にムラがクニへとまとまっていく頃ですが、関東の土器を見るとむしろ、ムラごとといってよいほど狭いエリアご

とに、土器の形と紋様がバラエティに富み、微妙に異なっているということに、驚きました。

特に東関東系と南関東系の土器群が並存し、さらにこの影響を受けた在地の土器が共存する印旛沼南岸の遺跡群のモザイクのような土器型式の様相は、庶民の生活の反映であり、そこにはおびしゃや三匹獅子舞など、ムラごとに似て非なる民俗行事の多彩性に合い通じるものを感じます。

地形的にも親潮と黒潮が交差し、また古鬼怒湾と東京湾の内湾交通の接点である北総地域。この地の土器にみる弥生人とは、自らのDNAに流れる縄文の伝統の中に、新しい稲作文化を受容していった印波国の先祖の姿そのものだったことでしょう。

**道標データの追加**

**G09 御大典記念道標**

- ・角柱型文字碑
- ・「平戸橋経木下口  
当区経村上下市場口」
- ・場所：米本 2279 (下宿三叉路交差点を米本稻荷の方に15mほど入った左側)
- ・報告者：天野

**G10 馬頭観音供養塔**

- ・角柱型文字碑
- ・明治 39年 3月 18日 造立
- ・「北 平戸橋  
木下 道」
- ・場所：米本 2146 (丁字路路傍)
- ・報告者：園田

**チ 17 弘法大師道標**

- ・角柱型笠付刻像碑
- ・享和 3年 10月 21日 造立
- ・「北大和田佐倉道」
- ・場所：千葉市花見川区武石町 1-497 付近
- ・報告者：天野

編集後記：残暑お見舞申上げ候。猛暑の中、高津の調査に余念がない諸兄諸姉の活動をお伝えしたく、PCと格闘しています。(By. わらび)

[QWR07752@nifty.ne.jp](mailto:QWR07752@nifty.ne.jp)